

『おとぎの街 (03/04)』

雪が降ります雪が降る
鎮守の森にも街通りにも
シンシンシンと降り積もる
静かな静かな町並みに
雪が降ります雪が降る

雪が降ります雪が降る
裏路地通りの駄菓子屋で
赤いほっぺの男の子
手袋はめた女の子
二人で息を手にかけている
コンコン雪は降り止まず

雪が降ります雪が降る
あの家この家降り積もり
静かに佇む町並みは
積もる雪におとぎの世界
雪が降ります雪が降る

『鎮魂詩(三) (03/04)』

ー未明の叫びー
人の喚きは止まらなかつた
一瞬に屋根が地上についた
瓦礫の町の四方八方から
苦しい苦しい
助けてくれ苦しい
水をくれ酸素をくれ
女の呻き男の呻きが
幾重にも幾重にも響いている

止まった時間が動きだし
呻きは言葉にならず萎えて行く
助かった者のは必死に
声を頼りに瓦礫を掘出すが
萎えた呻きは一つ二つと消えて行く
一瞬に瓦礫となった町は
未明の中で幾重にも幾重にも
老若男女の喚きと呻きが響いている
時間と共に呻きが萎えて行く
行政はまだ単なる地震と
手立てすらもせずに
驚いて動きだしたのは
一日過ぎた翌日になってからである

人の涙は止まらなかつた
助けようにもどうにもならない
未明の瓦礫となった町
来るあてもない救助隊が
もうすぐ来ると地面の下に向かって
叫ぶ空しさに涙が溢れて止まらなかつた
一つ二つと萎えて行く呻きへ
涙が流れ落ちてしかたがなかつた
瓦礫の下に押し潰された命が
消えて行くのを見ているしかないのだ
もっと恐ろしいことが起こった
潰されて動けぬ人々へ
燃え盛った火が迫ってくる
萎えた呻きを炎が包み始めている

人の喚きは止まらなかつた
一瞬に屋根が地上についた
瓦礫の町の四方八方から
苦しい苦しい
助けてくれ苦しい
水をくれ酸素をくれ
老若男女の呻きが
幾重にも幾重にも響いている

『鎮魂詩(四)』(03/04)

ーボニー・リン・ウオンー
 ボニー・リン・ウオンは
 花嫁衣裳が気にいって
 着せてもらって無邪気に喜んだのが
 去年の十一月の日でした
 ボニー・リン・ウオンは
 今年の正月休みには
 念願の中国旅行がなくなって
 一月十日に帰ってきたばかりでした
 ボニー・リン・ウオンは
 よく皆と一緒に笑ったり憤慨したりと
 誰からも慕われていた
 英語を教えている先生でした
 ボニー・リン・ウオンは
 明るく活発でいずれ大学院へと
 目的を語り質素な生活をしていた
 クリスチャンでした
 ボニー・リン・ウオンの亡きながら
 二日後の夜になつてから掘出されました
 見つけだした彼女の品々は
 遺品となつて無言の彼女の傍らへ
 仲間の涙と共に置かれました
 ボニー・リン・ウオンは
 遺体となつて一人
 一月二十三日に米国へと旅立ちました

両親の涙のもとへと帰りました

ボニー・リン・ウオンから
 手紙が届きました
 日本に帰ったら遊びに行きますと
 懐かしい彼女の筆跡でした
 中国で出した手紙が
 彼女が去った後今届いたのです

『鎮魂詩(五)』(03/06)

ー老母の叫びー
 瓦礫となった家へ向かつて
 母親は狂ったように
 わが子を孫の名を呼び続けている
 次から次と五人の名を
 地面に向かつて叫んでいる
 気が狂うように叫び続けている
 オーイこのままだら
 あんたの奥さんは気が狂うぜ
 父親は後ろから羽交締めにし
 無事だった家まで goメートルを
 渾身に力で妻を引きずった
 訳を話して預ってもらった

母親は身体中震わせ
 歯をカチカチ音発てながら
 自分は気が狂うと思った

ー老夫の心ー
 老夫は瓦礫の山を崩し始めた
 一人では動かぬ幾重にも入り組んだ
 家梁を取り除こうと夢中である
 何もわからなかった
 この瓦礫の下に息子一家が生きている
 その思い出で一心であった
 早朝から始まってやつと昼近くになって
 あつた！ 見えた！
 瓦礫の中から孫の脚が見えてきた
 老夫は助かった者がにわかになつた
 救助隊へ懇願した一家を助けてくれー
 すまん堪忍やで こときれている
 生きている人間が先や堪忍やー
 呻き声の方へ彼らは走って行った
 俺も気が狂うかもしれん
 夫もそんな自分を感じ取った
 また一人で瓦礫をどかし始めた

ー月明かりー
 薄暗くなつてから救助隊が戻ってきた

夫が放心した状態で立ちすくんでいた
三人の子供を守るように
夫と妻が孫の上で折り重なっている
月明かりが一家の死骸を照らしていた
救助隊のどの顔も怒っているように
無言で亡きがらを取りだし始めた
もう涸れたのにどの顔も泣いていた
どないやー

父親は検視の医者にとぼした
即死です一家とも即死です
父親は苦しみの果てに一抹の助けを
聞いたような気がした
検視員はもう一度言った
一家ともかんばつ入れずの即死です

母親は夢遊病者のように
家の瓦礫の前をうろろしていた
こうやって未明に
本山中町二丁目は四十二人が一瞬に
老若男女も帰らぬ人となりました

『春の足音 (03/10)』

一昨日に降った大雪も
うそのように

野原には春の陽気が忍び寄っています
暖かい気配をいち早く察知し
日増しに芽を出しているのですね
春はもうそこまで来ているのですね

春はもう少しです
暖かい気配に草木は急いで
溶けた雪を食べています
冬のなごりと言えば
山肌の残雪や尾根をつらねている
白い雪冠だけになつてしまつたようです

雪が雨に変わって
一雨毎に冷たさは温もりに変り
凍りついた私の心は雪解け水のように
チヨロチヨロチヨロと溶け始め
かたくなに硬かつた拘りが
草木の芽の伸びと同じく柔らかくなる
のです

北の心が萎えるような苛酷の
吹雪舞う季節が去って
南の滋養に富んだ温もりの雨が

これからは町を濡らし
田畑の作物へ恵み降らせ
春はもうすぐなのですね

『砂城の楼閣 (03/12)』

人は誰でも産れてくる時
オギヤと泣きながら
この世に生命を受けてくる
なぜだか誰かが知らないが
確かこの世へ嫌だと叫びながら
この地球へ産れてくる

もっと他の星へ
産れたかつたのであろうか
あなたも私も
でも死ぬ時になつて
この地球がこの地上が
人類が愛おしく思い
私は旅立つのであろうか

地上のどこの村でも
砂城の夢を受け付けけない

厳しきがあるから
本物しか生きられないから
人は誰もが
砂城の楼閣へと逃げて行き
夢を求めて砂城の住民となる

もっと他の星へ
産れたかったのであろうか
あなたも私も
でも死ぬ時になつて
この地球がこの地上が
人類が愛おしく思い
私は旅立つのであろうか

人は誰でも産れてくる時
オギャーと泣きながら
この世に生命を受けてくる
なぜだか誰もが知らないが
確かこの世へ嫌だと叫びながら
この地球へ産れてくる

『山道 (03/12)』

だれ一人と訪れる事のない
深夜の山奥が路を
外灯がひとつ暗黒が海の中で
ぼく々と灯っている
何を照しているのだろうか
夜が海に佇んでいる
杉の樹木が列がひそりと
照されているのみである
何を照しているのだろうか
人生への道をであろうか
物音ひとつない闇の路を
ただただみじろぎもせずじいっと
深閑の闇夜が中で灯っている
人生の導灯火なのであろうか
暗黒と静寂の深夜が山奥で
外灯がひとつ灯っている

『都会と人間 (03/12)』

夜の無い煌々とした
色とりどりの
イルミネーションへ
蛾の様に人々は群れ集まって
意味の無い時間を

生きているじゃないか
灯りに吸い寄せられて
自己の人生を

ケタケタケタと
大笑い声で誤魔化して
不夜城の路は至る所で
人人人人人人の
顔顔顔顔顔顔顔ばかり
いやー朝だって
都心の駅でも同じですよ
電車から吐きだされてくるのは
人人人人人人人
顔顔顔顔顔顔顔ですよ
昼間だってあんた
不夜城の街の中は
人と顔ばかりですよ
それで
自己の人生を
ケタケタケタと
大笑い声で誤魔化していますよ

生きるって都心なのですか
この宇宙でこの地上で
人類はたかだか
まだ3000万年程度しか
生き続けていないのですよ

生物の様に
 何億年ものをの生き証人では
 なりえないのですよ
 人間社会はわずか100年前の
 事すら把握していませんのですよ
 人類の同じ苦しみを
 ずっと繰り返している
 社会なのですよ
 生きるって何なのですか

イルミネーションの海を
 高層ビルの林と
 空中を走る道路が
 不夜城内の建造物が
 人間の生きる
 証じゃないのです
 生きている人間が
 宇宙に対する証明は
 リヤ王であり
 イリヤースであり
 万葉集であり
 文学の世界なのです
 人間が存在の灯火の炎は
 彼ら人間を求めた
 作品の数々なのです
 人間の叫びを描き続けた

彼らの作品なのです
 不夜城内で
 これみよがしに
 熱弁を奮っている
 文化の輩ではないのです
 地上では不夜城などほんの
 一点でしかないのですからね
 後は暗黒の世界が
 広がっているのですよ

『鎮魂詩(十六)』(03/13)』

肌に温もりはあるが
 脈はすべて認められない
 運ばれてくるこれら遺体は
 何を語っているのだ
 二次救助が素速かったら
 どの遺体もとじる事がない
 生命だった事実をだ

震災のせいではない
 これはもっと違う
 地震が起きた後の
 社会のメカニズムの問題だ

凡てを震災のせいにして
 行政は彼らの税金を
 今まで何処へ使ったのだろう

孫と代わりたかったと
 涙する老人の苦痛
 人生を30年耐えてきた
 物言わない死に顔
 若い夫妻とその子供たち
 一家の亡きがら
 気が狂うであろう付添たち

詩人が残さずして
 詩人が記録せずして
 誰が真実を書き留める
 行政の死亡診断書ー即死ー
 あああ……あまさか
 馬鹿な！ 彼女は
 身籠って十ヶ月の身体なのだ！

『三月の雪』(03/13)』

今日も昨日の様に
 朝から南の風が

平野や街の上空を
ライオンのように凄じく
吹き荒れています
冬を押しやろうと
大地を狂吠えています
ゴウオーゴウオーゴウーと
冬の塊りを
一日中吹き飛ばしています

夜に降り始めた南の雨は
深夜に雪となり
未明には平野や山肌を
街の屋根や庭木を
うつつすらと雪化粧させて
日が昇るのを待っており
三月の雪は冬の
最後のお別れなのです
冬將軍が去って行く
合図なのです

『三月と春 (03/13)』

三月という日々は
冬の冷たさに萎えていた

生き物の心を
冬の寒さに震えていた
生き物の心を
冬の厳しさに泣いていた
生き物の心を
自然へと開放させているのです

山肌の気配も平野の様子も
息吹き始めている響きに
満ちているじゃないか
小鳥たちの声だつて
冬の響きと違うじゃないか
三月の日々の暖かさに
人はオーバーを脱ぎ捨て
自由を手にしよとするじゃないか

春の暖かさに温もりを忘れ
生き物の心は争い
春の穏やかさに我を無くし
生き物の心は貪欲になる
春の眠さに託つけて
生き物の心は怠慢になる
春の訪れは人の心を
正直に芽を出させるのです

『自由 (03/17)』

霧雨に煙る春先の
大地は
樹木が日増しに生きる事をなし
草は緑なる若草となす
生命が息吹きに満ち
春が陽々を待っている

地上へ出たミミズは
二度と地中へ戻れないと言う
延々と大地の中に住んだ
彼らは
ある日のこと突如として
自由を求めて地上を目指す

濡れた大地は
やがて勺熱の太陽が熱を
浴び続け
自由を求めた彼らは
カラカラな死骸となって
大地なる道に晒(さら)す

『鎮魂詩(七)』(03/18)』

握った妻の手が
冷たくなってきた
崩れた土壁の下で夫も
身動きが出来なかった
地上へ知らせるにも
声が無くなっていく
救助隊の姿を見ながら
夫の手は離れた
子供たちを頼む
良い人がいたら一緒になれ
夫は意識が無くなった
妻の目から涙だけが零れていた
十八日午前十一時四十二分
収容先の病院で夫は旅立った
一月十七日午前五時四十六分に突如の
大地が吠震へ人は何も出来なかった
近くの夫の妻の実家も
全員が瓦礫の下で亡くなっていった
妻には
夫の声が聞こえてきた
三途(さんず)の川を渡るなよー!

『鎮魂詩(八)』(03/19)』

火の粉の降りが
激しくなっている
母親も娘の遺髪を切った
避難民三千人と四十の遺体へ
火災が襲い始めている
次から次と親族が
遺体の髪を切り始めた
工作用のハサミである
早く逃げて下さいー
火が来ます
.....
駄目だおーい！ 遺体を運びだそう
それが先やー
一人の叫びに多くの人が
毛布をもって炎の中へ走り
何人もの人々の手によって
包まれた遺体が運びだされた
一月十九日午前零時の外は
凍てつく寒さの中だった

道路の中央分離帯へ
遺体が並べられた
罰が当たると彼らは思った
毛布を剥がし
寒さに震える人々へ
遺族が配った

どの顔も怒ったように
無言で焚き火を囲んでいる
一人一人眼底に焼きついた
人間の悲しさを
なすがままに
しているしかなかった
並べられた遺体が
静かに照されていることが
不思議に見えた
その日の凍てつく深夜は
月が煌々と地上を照し
星々が夜空に瞬いているのを
誰も知らなかった

『三月の風』(03/22)』

夜になると突如として
吹き現われる三月の風は
北風の名残なのか
それとも
南の風の忍び吹きなのか
通りをさっと通り過ぎて行き
赤提灯が揺れて
背の後ろの葦簾(よしず)張りが
ひゅーっと音を発てる
月の朧(おぼろ)にぐいっと呑み

冬に押さえていた血が
 生温い風へ騒ぎだす
 どうにもならない人生に
 醒めた目がじっと私を見つめる
 夜の風がひゅーっと吹き抜け
 私の人生を吹き去って行く

『鎮魂詩(九)』(03/25)

人の命が燃えてます
 深夜の凍てつく街通り
 いっそ
 私も燃やしておくれ
 黙って炎を見つめてる

いのち哀しや
 悲しや命
 生きて哀しい
 花一匂

たった一人残ったこの身
 燃やして包んで運んでおくれ
 生きて溶けない心ゆへ

帰らぬ人の旅路へと
 凍った心を燃やしておくれ

いのち恋しや
 花一匂
 生きて悲しい
 恋しや命

人の命が燃えてます
 深夜の凍てつく街通り
 いっそ
 私も燃やしておくれ
 黙って炎を見つめてる

『鎮魂詩(十)』(03/25)

この時に地上には
 大地震が起こって
 都は総てが倒れ崩れ
 人々はあるいは逃げ惑い
 人々はあるいは柱に押し潰され
 空中を走る道路をも落ち
 陸を走る鉄道も寸断され

この様にして
 五千四百九十七人の
 老若男女の人々が死にました

地球史新生代第四紀

「1995/01/17 am5:46 set TZ=JST-9」

アジア大陸塊の東
 太平洋との境に有りし
 数千余の列島島国の一つ
 昔倭の国と呼ばれし地に
 起きた惨事なりし

この時に火がそちこちより
 立ち上がりたし
 瓦礫となりたる街を
 火炎が音を発して包むなり
 人々はあるわ逃げ惑い
 人々はあるわ炎の中なり
 その立ち昇る火炎煙に
 昼は閉ざされ
 都は夜のこと様なり
 そは命の燃えし炎なりき

これらは朝日新聞朝刊(1995/02/17 02/28)へ
 連載されている「鎮魂歌」―震災の構図―を
 参考にして作りました。

『雪 (03/25)』

雪が降ります
 雪が降ります
 街の灯りに照されて
 春の息吹きを
 沁み込ませ
 淡い雪がふわふわと
 深夜の通りに
 落ちています

雪が降ります
 雪が降ります
 遠い野原へ川へと
 春の恵みを
 滲ませて
 真綿色の淡雪が
 優しく優しく
 落ちています

雪が降ります
 雪が降ります
 私の心に降り積もる
 子供の頃の思い出が

帰らぬ涙に姿変え
 目から溢れて
 落ちています
 戻らぬ日々の懐かしさ

『11月の涙 (03/28)』

母親が子供に謝っていた
 もう何日も御飯を食べていなかった
 子供は学校の昼休みになると
 きまって教室を抜けだし
 校舎の裏で午後の授業を待った
 腹がぐうぐう鳴って水を飲んで
 ……

懐かしい思い出というより
 嫌な思い出である
 出来れば忘れたい思い出である
 父親が亡くなったのは
 彼が二十八才の時であった
 母が亡くなったら
 嫌な思い出も
 懐かしい思い出にかわるのだろうか
 消したい子供の頃の貧しさが
 心の底から沸いてくる
 人生が道でその苦さを飲み

私は途方にくれる
 ……

胸襟を開いた幸福など
 私の人生には無縁なのです
 死んだら今度こそ
 幸福になれるのだろうか
 今度こそ
 幸福を掴みたいのです

『ホーイのホイ (03/28)』

何処に幸福など
 有ると言うのだ
 私の人生ホーイのホイ
 どうして
 生きているのかも
 わかりませんホーイのホイ
 どうしたらよいのかも
 わかりません私の人生
 ホーイのホイ
 死ぬる勇気がないから
 生きているのですよ
 ホーイのホーイのホイ
 私の人生ホーイのホイ
 死んでも

涙を流す人がいないのに
勇気がないって悲しいね
私の人生 ホーイのホイ
死んだら
幸せになれるのだろうか
ホーイのホイホーイのホイ

End all 1995/03